

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

研究公演『ホピの踊りと音楽』の交渉過程で得られた民族誌的知見

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 敦規 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5624

研究公演『ホピの踊りと音楽』の交渉過程で 得られた民族誌的知見

文 伊藤敦規

いとう あつり

助教、研究戦略センター。専門は社会人類学、特にアメリカ合衆国先住民のアートと知的財産権研究。共編著に『世界のなかのアイヌ・アート』（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、論文に「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて—米国南西部先住民ズニによる国立民族学博物館所蔵標本資料へのアプローチ」『国立民族学博物館研究報告』35巻3号など。

はじめに

博物館機能を備える研究機関の国立民族学博物館（以下民博）は、研究成果の社会還元を目的とした様々な催事を主催する。「研究公演」はその1つで、民博の年間事業記録である『要覧』やHPには、世界の諸民族の音楽や芸能などの公演をとおして、聴衆に文化人類学や民族学への理解を深めるイベントと記載されている。筆者は2012年3月20日の『ホピの踊りと音楽』を企画から実施まで担当した。以下ではその経験を元に、実施に向けた諸種の交渉の中で明らかになった米国先住民ホピの民族誌的知見をまとめてみたい。

ホピの儀礼とホピ文化の秘匿性

2011年3月、民博は新構築を済ませたアメリカ展示場をオープンした。その「創る」セクションには、米国南西部先住民の宝飾品の歴史と現状を紹介するコーナーが新設された。南西部は全米の中で先住民人口が比較的多く、現在でも独特の文化が維持され発展している地域である。展示場には、1970年代後半と2010年に収集した、ホピ（Hopi）をはじめとする先住民が多様な技法を用いて制作した数十点におよぶ宝飾品と、道具類の一部、制作工程をまとめた映像資料が陳列されている（写真1）。

もちろんホピの人々が制作する「もの」や暮らしぶりは、宝飾品とその制作に限られるわけではない。たとえばアートであれば、木彫人形、土器、織物、籠細工、絵画や壁画など多岐にわたり、民博の収蔵庫にも数百点が収まっている。ただしこれらは全て有形物で、民博はホピの芸能や儀礼といった無形文化を記録した映像・音響資料を所蔵していない（研究公演企画時）。研究公演の企画の出発点は、音響システムが常設された収容数450名の講堂を会場とすることであったが、事業としての趣旨は、聴衆に既存の有形資料の存在を意識させながら

も、無形文化との連関においてホピ文化に関する理解を促すことにあった。そのため実施内容は、所蔵資料が実際に使用される文化的脈絡の具現化が優先課題となり、自然環境と生業活動の中で育まれた独特の精神文化である儀礼を候補とした。

年間降雨量300ミリメートル未満の乾燥地に暮らすホピの日常生活の中心的関心は、トウモロコシなどの生育と降雨祈願の儀礼の執行とその準備にあるといっても過言ではない。冬至から夏至までの期間は、雨や雨雲や祖霊の化身であるカチーナ（Kachina）が登場する仮面儀礼が執り行われ、夏至から冬至の期間には女性を含めた仮面を付けない人間が演じるソーシャルダンス（tsele）や宗教結社の儀礼がいくつも行われる。カチーナ儀礼はキヴァ（kiva）と呼ばれる特定の宗教結社に加入した男性が担うもので、その男性の個人的な儀礼参加の経験や所属する氏族に応じて儀礼ごとに役割が異なる。

カチーナ結社への加入儀礼を経ない男児や成員権のない女性は、仮面や儀礼具の制作と儀礼の打合せと練習が行われる特定の場への物理的アクセスや、儀礼に関する質問行為（知的アクセス）、そして双方に関する記録行為が慣習的に禁じられる。しかし一部を除き、儀礼自体は住居が密集する村落の広場で行われる場合が多く、その様子はあらゆるホピに公開され、場合によってはよそ者にも鑑賞の門戸が開かれる。ホピの人々は、「カチー



写真1 アメリカ展示場の米国南西部先住民の宝飾品コーナー（2012年4月25日、筆者撮影）。

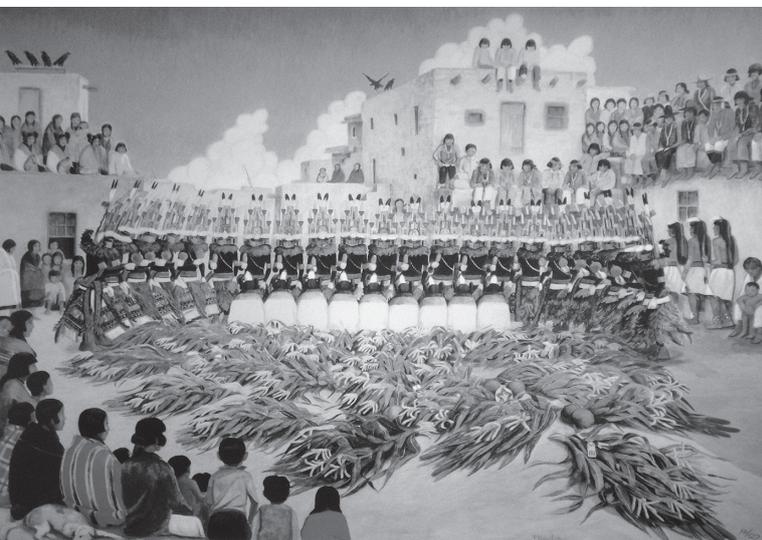


図1 『Home Dance』、フレッド・カポーティ作、1946年、アクリル画（複製）、筆者所蔵。

ナが雨を、儀礼を見守る聴衆が雨雲を象徴する」という説明をしばしば口にする。儀礼の主目的は降雨祈願であり、演じる側と見守る側の両者の共存によって祈りが現実化する。それゆえ雨雲としての聴衆の参集が歓迎されるのである（図1）。

企画

カチーナ儀礼は宗教的制約が多いため、複数のホピの友人に民博で行う際の実施内容についてアイデアを求めた。するとソーシャルダンスなら可能だとの回答が得られた。これは前述したように、女性や仮面を付けない人間が演じる一種の儀礼である。文字通り和訳すれば「社交ダンス」となるが、ホピの文脈においては農作物の生育を促す降雨・降雪や地中の保湿の願い、動植物への祈り、近隣の先住民集団を礼賛する多様な「季節の踊り」の総称（*tselew*）である。男性が司るカチーナ儀礼に対し、演者に女性が含まれることから「少女のダンス（girl's dances）」と呼ばれたこともある（Persons 1933：61）。

ダンスの当日は聴衆の参集が歓迎され、村落の広場は数百人以上の群衆でごった返す。ただしカチーナ儀礼のような秘儀ではないため、宗教結社成員による記録用機材の所持検査や警邏^{けいら}といった厳しい行動規制がしかれることはない。時と



写真2 水の乙女のダンス（Page 1982: 56より転載）。

してホピの人々が、華やかな衣装を身にまとった演者や勇壮な歌い手たちをスチール撮影したり、歌を録音したりすることもある（写真2）。撮影した写真を家屋や氏族の集会所に飾ったり、録音した歌を家事やアート制作の合間に聞いたりする。近年ではフェイスブックなどのSNSメディアやYouTubeなどに、画像や映像を投稿することもある。もちろん主たる開催場所は現在でも保留地の村落だが、ダンスグループは都市部の博物館が主催するアートショーなどに招聘されることもあり、祝祭的なアトラクションとして披露されることもある。アメリカ展示場の新構築を祝う内容としてふさわしいものだと判断した。

演者の組織

ソーシャルダンスの演者は、その都度組織される。構成は、複数組の踊り手、数十人の歌い手、歌をリードする数名の太鼓の叩き手、そして数百人規模の観衆からなる。研究公演の場合、もちろん現地から雨雲役の観衆を招聘するわけにはいかない。先行研究にはソーシャルダンスの1つの「バッファローダンス」に関する民族誌的記述が残されているが、その内容は実施年月日、演者の配置と動作、衣装の紹介、ペアになる男女の踊り手の家族間での交わされる贈答品、開催村落名や進行表に限られていて（Fewks 1903 [1985]：30-31；Persons 1925：16-18；1933：61；1936：123-130；Beaglehole and Beaglehole 1935：44）、人員組織に関する具体的な情報は得られなかった。

そこで、2010年の資料収集の際にコーディネーターを務めた宝飾品作家で、カチーナ結社と男性結社へ

の入会を済ませたジェロ・ロマベンティマ氏に再び照会した。結論として、組織化は自薦と他薦が併存し、優先基準と忌避の慣習が存在するという。まず、女性の踊り手は妊娠未経験の者が務める慣習がある。母や母方オバ（ホピは母系出自のため同一氏族の成員）が参加を促すものの、強要はしないため自薦となる。男性の踊り手は婚姻状態や嫡出子の有無は問われないが、女性の踊り手の平行イトコや母方オジがパートナーに指名されるため他薦となる。

ロマベンティマ氏は、外国公演で見栄えがして聴きごたえのある規模にするためには、4-6名の踊り手と6-8名程度の歌い手が好ましい、という意見を提示した。そして男性の踊り手や歌い手の選定については自身に権限を委ねてほしいという要望を筆者に寄せた。ソーシャルダンスでは、特定の男性が衣装や道具や食料などをまかなうホストとして名乗りを上げて男性メンバーを組織する。ホストは必要な場合は衣装の素材を購入し、組織した男性たちと日中の時間を衣装制作に費やす。本番の16日前（東西南北を表す聖数「4」の倍数）から、ホスト宅や親族の家などで、歌合わせや踊りの動作確認などのための練習を夕方から深夜まで連日繰り返し行う。練習の合間には必ず軽食やタバコなどが供される。ホストとその家族にとって練習は楽しい機会であるが、出費がかさむため経済的・精神的負担も大きいのである。そうした負担を軽減させるため、ホストは自分の兄弟や息子、同一氏族の成員、姉妹の夫、同じ宗教結社に属する儀礼上の息子（擬制的親族）といった、自分に近い

者もしくは従属的立場にある者をメンバーに配置していく。このようにソーシャルダンスは、ホストを中心にして組織される親族・氏族・胞族（複数の氏族からなる外婚単位）成員などによる一種の互助活動であり、準備期間を含めて互いの紐帯を顕在化させる一時的な場であるともいえる。演者の組織化についてホストに裁量を委ねることに納得し、イベントの主催者たる民博側が口を挟むのを控えることにした。

ロマベンティマ氏は、民博が所蔵する宝飾品の制作者もしくはその親族、パスポート申請に問題がないと思われる者、居住地域、年齢などに偏りが生じないように、自身を含む7名の男性を演者として組織した。企画を練る中で数種類のダンスを披露することになったが、そのためにはプログラム構成上、衣装替えと髪を結う時間の確保が必須となる。同氏の儀礼上の息子でありフルート演奏家でもあるアンドリュース氏をメンバーに加え、団体での踊りと個人演奏を交互に配置することにした。女性演者については、未婚で妊娠経験のない高校生の3名に決まった。今回の研究公演では先行して男性ダンサーの選出をした点で、現地の文脈とは異なる手順になったが、ホピの宝飾品展示コーナーを含むアメリカ展示場のオープンを祝うイベントという、主催者側の意図を組み込んだ11名の人的組織が完成した（写真3）。



写真3 「ホピの踊りと音楽」の演者と筆者（左から6番目）。

招聘状

これまでの研究公演ではかならずしも日本国外在住の外国人を招いてきたわけではなく、日本国籍保持者や日本に居住する外国人を演者として招くケースもみられた。国



写真4 バッファローダンサー（2011年12月31日、アリゾナ州ツーソンにて筆者撮影）。

際シンポジウムなどと同様に、日本国外に居住する外国人を招聘する場合に必要なとなる主な実務は、ビザ発給のための

書類作成補助、航空券と通訳と宿泊先と食事の手配、謝金の支払い手続などがある。査証発給は招聘元の住所によって管轄が異なるが、民博の場合は入国管理局関西支局となる。照会の結果、観光客と同様の「ビザ無し」での入国が可能であることが判明したが、入国審査の際に生じかねないトラブルを未然に防ぐため、出演契約を兼ねた正式な招聘状を発行し、演者それぞれに入国審査時に携行してもらうことにした。

招聘状はこちらの意図しない文脈でも効果を発揮することになる。ソーシャルダンスは、ホストが居住する村落でかならずしも開催されるわけではなく、他村に招かれることもある。その場合、ホストは自分の居住する村落を統治するチーフに実施と人員派遣の可否を問い、了承されると招聘元の村落チーフに報告を行って開催の準備をする。研究公演のためにホストを務めたロマベンティマ氏はこれにならい、居住村（ソンゴパヴィ村落）のチーフに民博発行の招聘状を見せて趣旨を説明し、派遣の了承を請うたのである。つまり、入国審査のために用意した書類が、ホビの文脈における正式な申請・承認過程の決裁に利用され、結果として研究公演がソンゴパヴィ村落公認のものとなったのだ。

衣装と道具の発送

歌い手が着用する衣装は、ダンスの種類にかかわらずほぼ同じである。バンダナ、リボンの付いたシャツ、スラックス、羊毛を編んだベルト、首にかけるトルコ石な

どの装飾品、皮製の手首あて、モカシンと呼ばれる革靴といったもので、手にはヒョウタン製のガラガラや太鼓とバチ

を持つ。他方、踊り手の衣装はダンスによって大きく異なる。たとえば「バッファローダンス」でバッファロー役を務める男性は、①白色のモカシン、②スカルクの毛皮のアンクレット、③蛇の模様が描かれたキルトの腰巻き、④赤く染めた羊毛の帯、⑤羊毛を編んだベルト、⑥角の付いたバッファローの頭飾り、⑦頭飾りに付ける扇状に配したワシの尾羽、⑧オウムの胸毛の束、⑨手首あて、⑩カウベル（鈴）、⑪トルコ石などの装飾品を身につけ、手には⑫弓矢と⑬ガラガラを持ち、裸の上半身と顔には天然顔料を塗る。女性は男性と同じく①と②の足回り品と、⑦と⑧の羽根、⑩より小型の鈴や⑪の装飾品に加え、⑭刺繍が施された白のドレス、⑮白色無垢の帯、⑯白いキルト、⑰毛糸をよった輪、そして⑱花を付けた小さな籠と⑲花とワシの羽根を施したワンス（指揮棒）を手に持ち、顔にはトウモロコシの実を碾いた白い粉末を塗る（写真4）。

1月に行われることが多いバッファローダンスは、春の発芽のために冬季に希求される雨と雪と嵐、その使者とされるバッファローへの祈りを捧げることを目的とする。踊り手が身にまとう上記の衣装には、それぞれ文化的な意味が込められている。たとえば①と②は白い雪であり、③と④はバッファローの機敏性と力強さ、⑥は動物のバッファローそのもの、⑦は降雨と降雪への祈り、⑧雨と雪によって満ちる土壌の水分から育まれた栄養価の高い農作物とそれに恵まれる人生、⑫と⑬はバッファローの性別（雄）、女性がまとう⑮と⑯は汚れのない人

生と雪の積もった畑、⑮と⑯は春の訪れを象徴的に表しているのだ。

研究公演ではバッファローダンスに加えて、夏風にそよぐトウモロコシの葉の動きを模した「コーンダンス」と、収穫直前の農作物に必要な夏の嵐を祈る「水の乙女のダンス」の3つをプログラムに配置することにした。ホピの世界観と信仰や祈りを体現するためには、ダンス毎に異なる衣装が不可欠で、衣装の所有状況を確認する必要性が生じた。ほとんどの衣装と道具類は個人もしくは家族成員が所有するが、たとえば⑥のバッファローの頭飾りを所有する家庭は少数である。⑥はバッファローダンスのホストを務めた男性が素材を集めて作るもので、それが難しい場合は、所有する男性に練習期間を含めて借用を依頼することがある。また、羽根の所有と管理にはジェンダー規範が生じていて、⑦と⑧のような祈りに関する鳥類の羽根を女性が触れることは忌避される。羽根は通常は1枚1枚ばらばらの状態で所有者の個々の男性が大切に保管し、カチーナ儀礼やソーシャルダンス毎に使い回す。衣装制作については、たとえば水の乙女のダンスでは、女性の踊り手が積雲を象徴する1メートル四方の木製の頭飾りをかぶる。女性用の頭飾りはダンスが開催される都度、女性の頭部のサイズに合わせてパートナーとなる男性を中心にその男性の生物学的父と儀礼的父およびそれぞれの父方男性親族が、宝飾品制作と同様に糸鋸で制作する。

羽根の調達

数ある実務の中で、今回の場合もっとも困難を極めたのがこれら衣装と道具の発送手続であった。ソーシャルダンスを含むホピの儀礼具や衣装には、天空神に降雨の祈りを伝達するオオタカやイヌワシやコンゴウインコといった鳥類の羽根が多数使用される。ただしこれら

は、1973年に制定された「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」(通称ワシントン条約、^{サイテス}CITES)によって、絶滅危惧種として指定されているため、日本への持ち込みには大きな困難が生じた。

ホピの男性たちは、新年にイヌワシやタカの雛を捕まえる巡礼に赴く。様々な儀礼を伴って捕獲した雛鳥は、人間の新生児と同様の誕生儀礼と命名儀礼を実施して大切に育てる。そして夏至の前後に行われる年間最後のカチーナ儀礼時に、霊魂が天空に「送られ」、死骸から外した羽根は結社の成員に分配される (Page and Page 1982: 185-204)。米国連邦議会は1978年の「アメリカ・インディアン宗教自由法」と1994年の「アメリカ先住民信教自由法」によって、先住民が宗教儀礼の一環として絶滅危惧種のイヌワシなどを捕獲・利用することを認めている。しかしながら輸出と再輸入については、所持者の出自にかかわらず、内務省管轄下の合衆国魚類野生生物局への正式な届け出が必須となる。

そのため、男女5名のダンサーが身につける合計300枚以上の羽根の1枚1枚に関する、入手経路、入手者名、入手年などの項目記載と証明義務が生じた。また、輸出入の専門業者の話では、たとえ申請が認められても、仮に日本で一部を紛失した場合には、輸出時と数量が異なるために、同梱する衣装を含め再輸入が許可されない状況も生じかねないという。羽根の発送手続のために、筆者・民博事務職員・ホピのホスト・ホピの演者・米国政府機関・運送業者が数ヶ月にわたって相互に交渉を続けてきたが、儀礼具と衣装の紛失リスクや、手続のための労力と入手経路の証明不可能性、ホピの男性演者が実際の準備作業で頻発させた羽根のカウントミスを鑑み、公演実施2ヶ月前の時点で発送を断念した。

ホピの演者の一部からは、原寸大にカラーコピーした紙製の羽根で代用する案も提示されたが、最終的に素材

にこだわる意見が優勢となり、輸出入の申請義務が生じない日本国内での羽根の収集を行うことになった。調達すべき数量とサイズと採取元の個体種と部位が指示され、相談の結果オウムとコンゴウインコについてはクジャクで代用することになった。まず社団法人日本動物園水族館協会にイヌワシ、タカ、クジャクを飼育する動物園を照会し、その上で、研究公演などの広報事業全般を担当する民博の企画連携係の職員が総出で、複数の動物園への羽根の管理状況の問い合わせと寄贈交渉を開始する。幸いクジャクの羽根は比較的容易に確保できたが、タカとイヌワシの羽根についてはそもそも個体数が少ないことと、羽根が抜け替わる季節が初夏であるため、必要な枚数を調達することは困難を極めた。公演開催2週間前になって、北海道アイヌの知人からノズリ（タカの亜種）の翼が寄贈されたのに続き、札幌市円山動物園からイヌワシが死亡したので検死のための解剖後に羽根を寄贈することができるという連絡が入った。そのほかの羽根はアドベンチャーワールド（和歌山）と熊本市動植物園からの寄贈があり、開催直前にイヌワシの尾羽根12枚と風切り羽根16枚、オオワシの尾羽根13枚と風切り羽根26枚、クジャクの目玉模様の羽根56枚と胸毛400枚、ノズリの両翼、トビ（タカ的一种）の羽根複数枚を用意することができた（写真5）。

広義の研究公演

民博の2011年度版の『要覧』には、『ホピの踊りと音楽』の実施日が2012年3月20日（火・祝）、解説を行ったのは筆者、出演はフレデリック・アンドリュース氏とジェロ・ロマベンティマ氏ほか、参加者数は563名、そしてこれまでの多くの研究公演と同様、この研究公演は展示関連事業の広報活動（「春の民博フォーラム2012—たっぷりアメリカ」、2012年1月7日～3月25日）の一



写真5 羽根の準備（2012年3月19日、みんぱく講堂楽屋にて筆者撮影）。

環として企画されたとの記載がみられる（国立民族学博物館2012：41）。

企画から実施までの現地との交渉や実務処理はほぼ1年間続き、合計約1,700通のメールや電話や実務補助のための現地訪問中のやりとりの結果として、演者の組織化やホストによる村落チーフへの申請・承認過程、衣装の象徴的意味、羽根の調達と管理、民博の控え室で実施した羽根の束ね作業など、先行文献には記述がない新たな民族誌的知見を多数得ることができた。それらの一部は本稿に記したほかに、公演当日の口頭解説と配布資料の作成によって、研究成果の公開につながったと思われる（伊藤・アンドリュース・クワンカフテワ2012）。その意味で研究公演とは、プログラムの開幕から閉幕までのきわめて短期的な舞台上の演目だけではなく、企画から始まり、準備期間中の交渉とそこから得られた知見を分析・記録する行為をも含む、長期間にわたる研究資源獲得の過程と捉えることも可能であろう。

【参考文献】

- 伊藤敦規・フレデリック・アンドリュース・ジーン、クワンカフテワ2012『アメリカ先住民 ホピの踊りと音楽』自費出版。
- 国立民族学博物館2012『要覧2012』。
- Beaglehole, Ernest and Pearl Beaglehole 1935 *Hopi of the Second Mesa*. *Memories of the American Anthropological Association* 44.
- Fewks, Jesse Walter 1903[1985] *Hopi Katchinas: with 260 illustrations, including 70 in full color*, New York: Dover Publications, Inc.
- Page, Susanne and Jake Page 1982 *Hopi*. New York: Abradale Books.
- Parsons, Elsie Clews 1925 *A Pueblo Indian Journal 1920-1921*. *Memories of the American Anthropological Association* 32.
- Parsons, Elsie Clews 1933 *Hopi and Zuni Ceremonialism*. *Memories of the American Anthropological Association* 39.
- Parsons, Elsie Clews (ed.) 1936 *Hopi Journal of Alexander M. Stephen*. *Columbia University Contributions to Anthropology* Vol. XXIII.